



鴨川市太海は、昭和初期まで波の豊太(豊かな恵み)に感謝して「波太(ナブト)」と呼ばれていました。地元の人々にとっては、ここは今でも波太のまま。昭和の頃から変わらない、どこか懐かしい時間の流れの中で、心緩めて歩きませんか。

波太は、まるで絵を描くために造形されたような自然美が画家に注目され、明治時代にはすでに日本近代洋画界の先駆者である浅井利がスケッチ画でその風景を残しており、大正時代に入ると本格的な写生地として多くの画家が足を運んだ。当時この地は「西の波切に東の波太」と称され、日本二大写生地として画家たちのメッカであった。
(西の波切：三重県志摩市大王町波切海岸)



つげ義春

代表作である「ねじ式」は波太が舞台だと言われている。何の変哲もない路地から機関車が飛び出す1コマはここから生まれた。波太の路地には、芸術家の想像力をかきたてる何かがつまっているのかもしれない。

安井曾太郎の外房風景

日本のセザンヌといわれた日本洋画界の巨匠が描いた、大正時代の波太の原風景「外房風景」。「風景画家を志すなら、波太へ」という言葉を残しており、有名無名の画家たちは波太を目指した。この作品は、岡山県倉敷市の大原美術館に収蔵されており、美術館で販売されている絵葉書を江澤館で求めることができる。



波太の路地のランドマーク。芸術家気分、波太の思い出をつづって誰かに送ってみては…



仁右衛門島

波太のシンボル仁右衛門島は、明治頃の地図をひも解くと「波太島」の表記が確認されます。現在は、38代続く島主・平野仁右衛門氏の名をとり、仁右衛門島と呼ばれています。季節の草花や磯の風景は、波太の自然の宝箱。



波太のことならナブトマニア <http://ameblo.jp/nabutomania/>

